はじめに

昨今の考古学研究の方法が自然科学分野にむかって大きく前進し、広く関係学科との協合で処理することが目立つようになった。旧石器研究についても、同様で、充実したものになりつつある。日本の旧石器文化研究の曙は、八幡一郎教授の中部山岳地帯における剝片石器の注目にはじまることは周知の如くである。われわれ教授に教えをうけたものは、戦前旧石器文化について何ら関心もなかった当時のことであって、眼を輝かせたものであった。それにしても戦後まで誰一人として、その開拓を志した者がなく、そういう意味では、不肖の弟子達であった。

八幡一郎教授は、われわれに考古学研究法を厳しく教えられた。そして一番私達の脳裡に焼き付いて離れることのないのは、学問の峻厳さであった。「峻厳」という言葉は、非常にきびしいことと、その能度を意味するものである。如何なる学問も、その体系において厳粛でなければならぬ。学問は越えて行くものであって事実の検討において論争があるのである。「論争」ということのより安易さは許すべきではない。この八幡教授の御教を私達の学問の中で充分生かそうと努力しているが、これまたむずかしいことである。

さて、八幡一郎教授は、この度、50年振りで病気入院（先生の書簡）されたよし。私達はできるだけ早く病気全快を祈った。幸にしてこの度無事御退院になり、東京の街を歩いておられる様子である。教授の学風によって研究をすすめる大勢の学徒のためにも、教授には御健康に注意されて益々御指導を願い度いものである。

この度、教授に「宮崎県船野遺跡における細石器文化」はじめ4点の研究報告をお読みいただくことになった。厳しく御指導を賜わりしたいと願うものである。

本号は、別府大学考古学研究室が、3年間の継続調査で精査した宮崎県船野遺跡を、橘昌信氏に執筆してもらい細石器文化の新しい知見を紹介することにした。また坂田邦洋氏には、熊本県天草の沖ノ原遺跡の調査で多くの遺骸とともに縄文後期の遺跡の調査を実施し、その成果として北久根山式土器の問題を提起してもらった。この2点の論文は、調査報告を兼ねたものであるが、いずれも、昨今の考古学研究の重要な課題の一つであって興味がある。私は、この二つの論文に刺激されて何時もの如く変りばいのしない「縄文後晩期黒色磨研土器」の解説をこころみた。もとより蛇足である。

宮崎大学教育学部の遠藤尚氏には、「宮崎県佐土原町船野遺跡の地質学的背影」なる玉稿をいただき、本誌の内容を高めることができた、ここに深く感謝申し上げる。

1975年6月15日鹿鳴越（かなご）えの寓居にて

賀　川　光　夫